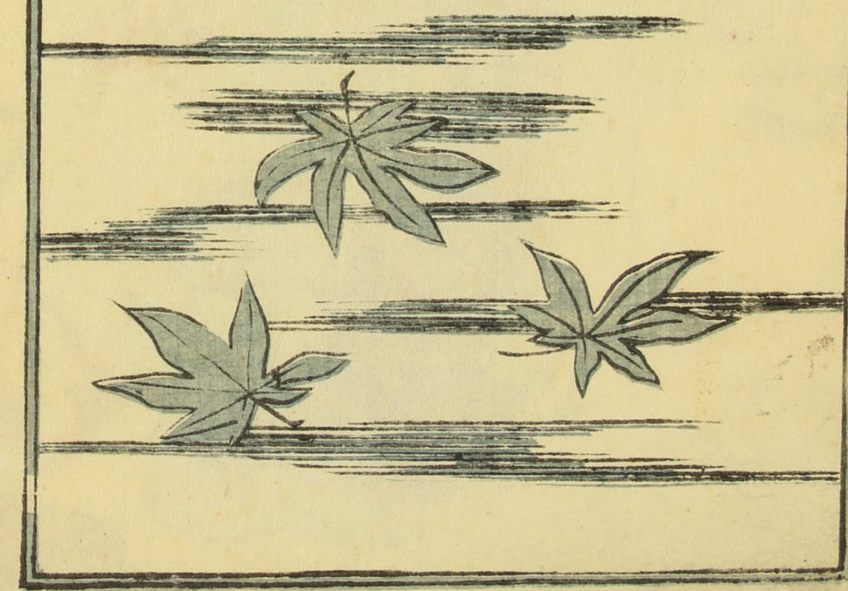
へ13
3702
21

明 へ13
號 3702
卷 21

唐衍義一名
妙陽保昌記



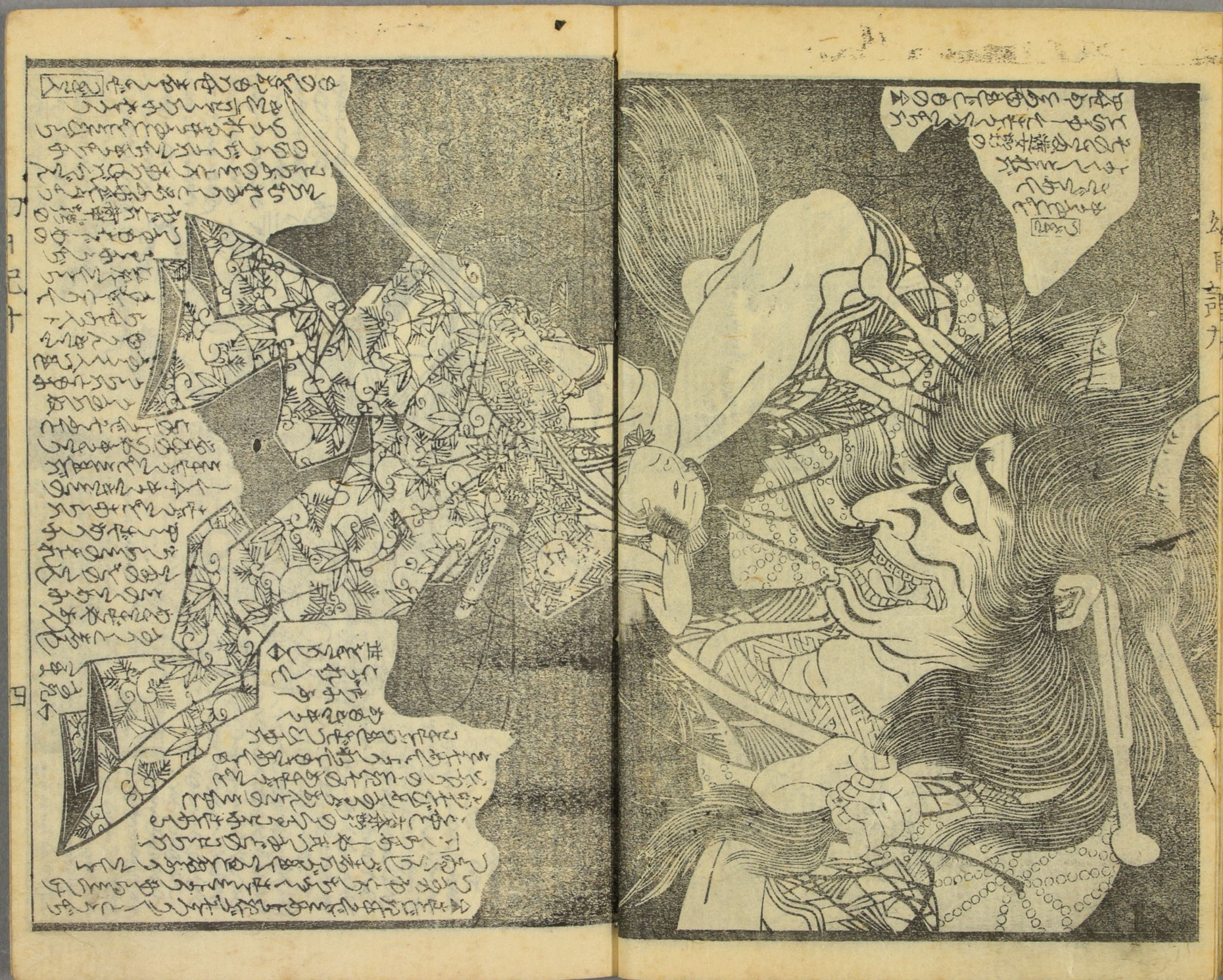
往時の草双紙の紙員僅か五枚ともて一巻とするを後か十枚を絨合せて一冊とするあり合巻物の本とりくの其頃か序言るあ〳〵及長編の續物あり〳〵今と近世の習風ともいふべき策子も長編あるか編毎に自序あるを得ざるを綴る詞も奈末與民の肱か頬を持せて拙手の有へ徒もか似て暮遅きて春の日も金烏翅を揚て西山か飛び玉兎浪を走りて東窻か来まべ燈火を秉らんも累い〳〵きか探り書〳〵机をおさめつ

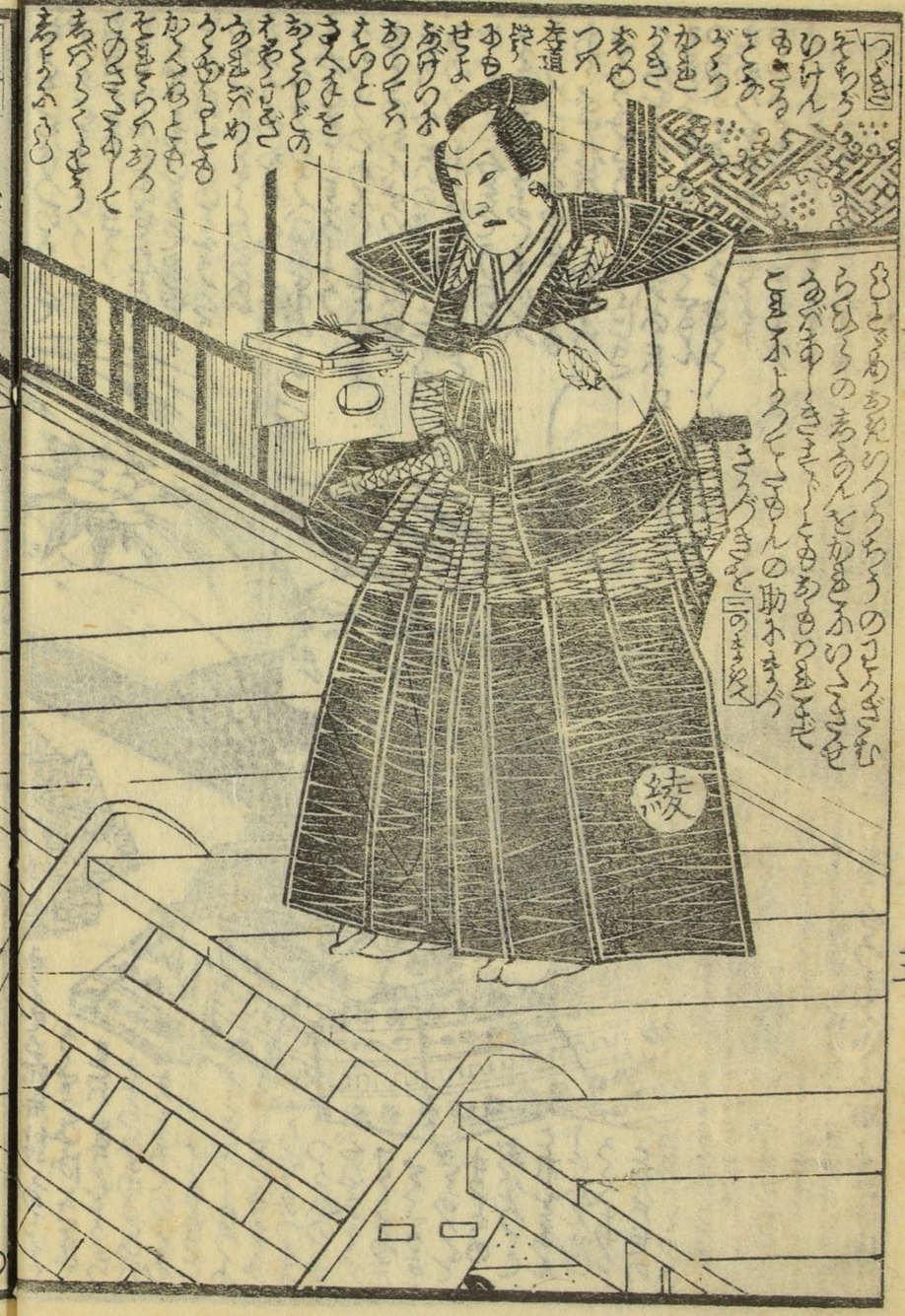
壬申晩春稿成
癸酉孟春發兌

戲墨堂主人識

宇都宮氏綱

十九編つゞき
暗夜
陰火
その火の
八




綾

子

多門

多門

春水作 國政画

水家 實母散

さんぜんさんど 中橋南傳馬町東側
ふとんちるみち 千葉堂孝輔製
一切のふぬ〆

柳蔭月朝妻 六編追出板 山々亭有人作 梅朝樓國貞画

藪黄鸝八幡不知 五編追出板 山々亭有人作 錦朝樓芳虎画

阿玉ヶ池櫛月形 初編より追々出板 山々亭有人作 陽斎豊國画

地本綿繪團扇問屋 紅英堂 蔦吉